

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査） 吉富 朝子



学位申請者 **TRAN THI MY** (チャン・ティ・ミー)

論文名 日越間ビジネス通訳における職業規範

【審査の結果】

審査委員会は吉富朝子を主査とし、本学の谷口龍子准教授（主任指導教員）、今井昭夫教授、内藤稔准教授、阿部新准教授の5名で構成された。最終試験は2020年3月30日に行われ、審査委員会は全員一致で、本論文が博士(学術)の学位を授与するのに相応しいものであるとの結論に達した。

【論文の概要】

本論文は、日本語とベトナム語のビジネス通訳者がどのような職業規範を持っているのか、また、実際の通訳でどのようにそれらが実現されているかを検証した実証研究である。調査は、以下のような手順で行われた。11名の日越間ビジネス通訳者（通訳経験5年以上）を対象に、半構造化インタビュー調査を行った上で、Toury (1995)、および Chesterman (1997) の翻訳理論をもとに、データから通訳者の規範意識を抽出し分析した。その後、ビジネス通訳場面のシミュレーションを実施、インタビュー調査で得られた通訳者の規範意識がシミュレーションにどのように実現されているかという点について、データを分析し、日越間ビジネス通訳者の職業規範の実態を解明した。

本論文は8章から構成されている。第1章では、本研究の背景、目的、意義を述べたのち、本論文の構成を示している。第2章では、本論文において分析に用いる概念を説明している。第3章では、Toury (1995) と Chesterman (1997) の翻訳規範モデルの内容、規範を抽出するために利用可能なデータ源、規範の記述に有効な装置について述べ、翻訳規範および通訳規範に関する先行研究を概観したうえで、本研究の位置づけを示している。第4章では、インタビュー・データおよびシミュレーション・データの収集・分析の方法を詳述し、第5章ではインタビュー・データの分析結果を、第6章ではシミュレーション・データの分析結果を示している。第7章では、インタビュー・データおよびシミュレーション・データの分析から導き出された結果をもとに考察し、第8章では、結論を述べたう

えで、本研究の限界、今後の課題と展望を述べている。

日越通訳に関してはこれまで倫理規定や実施ガイドラインなどが制定されていないという現状がある。したがって、通訳者は個々にどのような規範意識を持っているのか、またそれらの規範意識にもとづき、どのように通訳の実践に当たっているのか、それらを明らかにすることが本研究の第一の目的である。さらに、本研究の結果が日越通訳者養成プログラムの開発やビジネス通訳における倫理規定やガイドラインの策定に向けての素材提供となることを望んでいる。第2章では、通訳翻訳研究において規範という概念を提起した Gideon Toury による翻訳規範 (Translation norm) について説明している。Toury は、翻訳規範を「何が正しいか間違っているか、何が適切か不適切かについて、あるコミュニティ内で共有されている一般的な価値や志向であり、特定の状況にとって適正で適用可能な行為の指針」(Toury 1978:83-84 筆者訳) とし、訳出そのもの (textual) および訳出以外のテキスト (extra-textual) という2つのデータ源から抽出できるとしている (Toury 1978: 91)。第3章では、翻訳規範および通訳規範に関する先行研究を概観している。本調査の分析の依拠となる Toury (1995) と Chesterman (1997) の翻訳規範モデルの内容が述べられ、それらが通訳規範を抽出するために利用可能なデータ源、規範の記述に有効な装置であることを論じ、先行研究をふまえた本研究の位置づけを示している。Chesterman は、Toury による翻訳規範の概念を踏襲し、期待規範 (expectancy norms) および職業規範 (professional norms) という2つの上位規範から成り立っている翻訳規範モデルを提案している (Chesterman 1997: 64-70)。期待規範は翻訳プロダクトがどのようなものであるべきかという翻訳の受け手の期待の集合である。職業規範は、期待規範を満足させる目的で翻訳者が用いるストラテジーを含む翻訳プロセスに関係する規範であり、期待規範によって規定される。職業規範はさらに責任規範 (accountability norms)、コミュニケーション規範 (communication norms)、関係規範 (relation norms) の3つに分けられる。

日越通訳者11名に対するインタビューおよびシミュレーションは、2017年11月から12月にかけてベトナムハノイ市内のビジネスホテルの一室で行われた。インタビューは、各インフォーマントに対して1時間程度、半構造化インタビューの形式により、これまでの通訳経験や通訳訓練の内容、ビジネス通訳を行う上で心掛けている事柄や倫理規定に関する知識に関する聞き取り内容を収録した。得られたデータは、文字化し、グラウンデッド・セオリー・アプローチ (Grounded Theory Approach, GTA) により、分析を行った。シミュレーションは、日越逐次通訳者を介したタオルの売り込み場面での交渉を想定し、ベ

トナム人セラーが依頼者である場合と、日本人バイヤーが依頼者である場合との2つの場面を設定、基本的なシナリオに沿って実施した。ビデオカメラおよびICレコーダーで収録した音声データをBTSJ (Basic Transcription System for Japanese 宇佐美:2011)により文字化した。第5章インタビュー・データの分析結果として、日越通訳者の規範意識は3つに大別、7種類の細目に分類されることがわかった。責任規範意識(「入念な仕事ぶり」、「権力行使の自制」と「依頼者を裏切らない立場」)、コミュニケーション規範意識(「コミュニケーションの流れの円滑化」、「相互理解の促進」、「良き人間関係の構築・維持」)、関係規範意識としての「意味的類似性優先」である。第6章のシミュレーション・データの分析では、これらの規範意識が通訳実践においていずれも守られていることが明らかになった。従って、これらは規範意識に留まらず、日越間ビジネス通訳における職業規範として位置付けられる。責任規範にある「入念な仕事ぶり」とは、通訳者が業務に対して常に慎重な姿勢を持ち、注意深い態度を表すべきだという規範である。通訳者が業務を遂行する際に十分な通訳パフォーマンスを発揮できるように事前に情報の収集、関連用語の確認、通訳中に発言内容を正確に訳すために記憶の補助としてのノート・テイキング、話し手に対する説明の要求、事後に業務の遂行中に出てきた新しい単語や分からなかった用語などを調べて用語集を作成・追記するなどの作業が挙げられる。「権力行使の自制」は、コミュニケーションの手段を独占し、操作するという通訳者特有の権力を行使することが会話当事者の主体性を阻害してしまう行為にならないように自制すべきだという規範である。この中には、通訳者が業務を遂行する際に仲介の範囲を設定し、会話当事者の意思を尊重し、通訳者自身の感情を訳出に反映させないようにすることなどが挙げられる。

「依頼者を裏切らない立場」は、通訳者が業務を遂行する際、中立的な立場、あるいは依頼者寄りの立場をとるべきだという規範である。依頼者寄りの立場をとる際、通訳者自身が依頼者側の一員であることを表明したり、依頼者の利益を維持・拡大するために提案したり、依頼者の目的達成のために表現を工夫したりすることなどが挙げられる。

コミュニケーション規範の一つである「コミュニケーションの流れの円滑化」とは、コミュニケーションが捗るように促進すべきだという規範である。通訳者が状況に応じてファシリテイトしたり、冗語および視覚情報だけで理解し得る発話文の訳出を省略したり、会話の流れの中にすでに出てきた情報について会話当事者の代弁をしたりすることなどが挙げられる。「相互理解の促進」とは、会話当事者が互いに理解を得ること、認識を共有することを促し、誤解が生じないように努めるべきだという規範である(通訳者が元の発

言を要約したり、前置きを適宜追加したり、会話当事者に対する補足説明、提案など)。

「良き人間関係の構築・維持」は、通訳者は会話当事者の間、あるいは通訳者自身と会話当事者との間に信頼感、親近感、和やかな雰囲気を作り出し、維持できるように努めるべきだという規範である。話し手に対して聞き手が好む話題を提案したり、聞き手の気分を害する恐れがある発言を修正・撤回するように勧めたり、罵詈雑言の度合い、前置きの長さ、誉め言葉の度合いを調節したり、親近感を感じさせる人称代名詞を使用することが挙げられる。関係規範としての「意味的類似性優先」は、形式的類似性、文体的類似性、効果の類似性の3つより意味的類似性を優先すべきだという規範である。通訳者による各種の仲介によって起点テキストと目標テキストの等価性が損なわれないように注意し、意識しながら業務を遂行する、誤訳に気づいたら訂正することなどが挙げられる。また、各規範の間で矛盾が生じた場合、どの規範を優先させ、どの規範を破るかについて個々の場面に応じて瞬時に決めていることと、規範同士が相互に作用することも本研究の分析・考察で明らかになった。併せて、通訳の実践において直訳がほとんど行われない理由として、瞬時のプロセスを必要とする通訳という特性、通訳のプロセスにおける規範の作用や日本語とベトナム語の言語体系の相違が挙げられることも導き出された。

さらに、本研究では、Chesterman (1997: 92-112) による語用論的ストラテジーの30種類に加えて、発言内容についての説明の要求、提案、ファシリテイトおよび会話当事者の代弁という4つのストラテジーからなる「通訳者役割論的ストラテジー」が取られていることが明らかとなった。そして、1つのストラテジー、または1つの作業が異なる規範に従うために用いられると同時に、1つの規範を遵守するために複数のストラテジー、あるいは作業が行われていることも確認された。

本研究の成果により、ビジネス通訳における倫理規定の策定に向けて議論がなされることが期待される。また、通訳者養成の現場への示唆としても有益であると思われる。

【講評】

通訳研究における職業規範の研究という先行研究の少ない中で、日本語とベトナム語の通訳研究について初めて本格的に論じた実証研究であり、翻訳研究の理論に基づいて膨大な調査データを丹念に分析した労作である。日越間の訳出したテキスト・データの質も高く、通訳データとしても貴重なものとなる。

一方、審査委員からは次のような点も指摘された。

① シミュレーション調査の方法は完全であったか(たとえば、クライアントがセラー側と

バイヤー側である2種類の調査の実施時期を空けるなどの方法があったのではないか)

- ② 本研究において Toury (1995) と Chesterman (1997) の翻訳理論の採用に至るまでの経緯がわかりにくいものになっている。
- ③ 今回の研究成果をもとに日越通訳者養成プログラムやビジネス通訳に特化した倫理規定の作成のためにどのような方策が提案できるのか、具体案が示されていない。
- ④ 日本語とベトナム語に特化した戦略と他言語にも応用できるものとを区別できれば通訳研究における貢献度はより高かったのではないか。
- ⑤ 通訳者の職業規範と、クライアントの期待規範との齟齬に注目して分析することもビジネス通訳に特化した実学として有益な研究ができるのではないか。

調査方法の問題について、チャン氏は十分自覚しており、多忙な通訳者に長時間協力を得ることが難しいことから、できるだけ時間を節約して調査を実施する必要があった旨の説明があった。その他の指摘に対してもチャン氏は的確かつ誠実に対応し、研究に対する真摯な姿勢が窺えた。

【総合評価】

学位請求論文の内容、最終試験での応答から、審査委員は全員一致で、本論文が博士(学術)の学位を授与するのに相応しいものであるとの結論に達した。